



Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』（その5：第IX章(1)）
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1999, 21, p. 13-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79800">https://hdl.handle.net/11094/79800</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アンドレ・マルチネ著  
『ステップから大洋へ——印欧語と「印欧人」——』  
（その5：第IX章（1））

神 山 孝 夫 訳

André Martinet :  
*Des steppes aux océans*  
——*L'indo-européen et les «Indo-Européens»*——.  
(Paris : Payot, 1987, 1994<sup>2</sup>.)  
(Cinquième partie : chapitre IX (1))

Traduit par Takao KAMIYAMA

本稿は下記の続編を成す。訳稿作成の経緯や方針については下記の同書訳（その1）の冒頭部分を、略語や参考文献については（その1）～（その4）を参照されたい。

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| その1 第I章～第III章   | 本誌 17号（1997）p. 63-95   |
| その2 第IV章        | 本誌 18号（1997）p. 171-194 |
| その3 第V章         | 本誌 19号（1998）p. 33-80   |
| その4 第VI章～第VIII章 | 本誌 20号（1998）p. 57-87   |

今回掲載すべく準備した第IX章の訳稿は本誌規定の量（400字詰め原稿用紙換算100枚）の二倍に達することが判明した。止む無く二編に分割することとし、同章後半部分は本誌次号に掲載を予定している。

無用な誤謬を避けるべく原著者との連絡を取りながら慎重に作成した訳稿ではあるが、不測の不備もあるかもしれない。諸兄のご叱正を賜れば幸甚である。

今回の訳稿作成に際し、平成10年度文部省科学研究費補助金（基礎研究（B）（1））を一部利用することができた。

## 第IX章

### 音韻体系（1）

9.1 音韻論とは本質的に個々の特定言語における発話の弁別的単位を扱う分野である。このような弁別的単位はその言語の音素と呼ばれる。アルファベット式の書記法が用いられている場合、個々の音素に対応しているのは原則として個々の文字である。確かにフランス語の *calcul*, *joli*, *carnaval* は【/kalkyl/, /zoli/, /karnaval/】に対応するため、上記の【一文字一音素の】原則に則っているが、*roues* 【/ru/】では2つの音素を記すのに5つの文字が使われており、ここに見られるように、フランス語の正書法はしばしば、そして体系的にその原則に合わない。古代の諸言語においてはこの原則が尊重されており、このような言語を扱う場合には、文字と音素とを同一視しても大した差しつかえはないと言える。しかし今日の多種多様な諸言語には執着 (*intérêt*) があるため、両者を区別することが必要になっている。

9.2 同様に音韻論と音声学も区別される。後者が広く言語音を扱う分野であるのに対して、前者の音韻論は各々の言語の弁別的単位の体系のみを扱う。スラッシュ【/ /】が示すのは音韻表記であって、すなわち特定の言語に特有の弁別的単位を表す。例えばフランス語の *roche* の場合には /rɔʃ/ と記される。音声表記を表すスクウェア・ブラケット【[ ]】が注意を向けているのは、これに囲まれた【音声】記号で記される物理的現実である。例えば上の例語のバリ風の発音を記せば [kɔʃ] となる<sup>(1)</sup>。

#### サンスクリットを基礎にした場合

9.3 印欧祖語の音素を同定し表記する際に、初期においては、サンスクリットのイメージが絶対的な影響力を持っていた。最初のうちは、印欧祖語がサンスクリットと全く同じであると考えられることさえあったのである。初期の比較言語学者諸氏は、サンスクリットの持つ子音体系の調和と均整を目の当たりにして、心底から驚嘆していたのであった。もっとも、このように均整が取れていること自体は異常なことではなく、多くの言語においてサンスクリットと同様の完全な均整が見られるのであるが、インドの文法家がこれをたいへん重要視していたのである。今日5類5系列と呼ばれているこの体系の概要は以下の表に示されているとおりである。

		類					
		I	II	III	IV	V	
系 列	1	p	t	t̚	c	k	無声音
	2	pʰ	tʰ	t̚ʰ	cʰ	kʰ	無声帶気音
	3	b	d	d̚	j	g	有声音
	4	bʰ	dʰ	d̚ʰ	jʰ	gʰ	有声帶気音
	5	m	n	ɳ	ɳ̥	( 2 )	鼻音
		唇音	歯音	反り舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	

9.4 上表では均整を乱すのを避けるため、6番目の系列たる摩擦音の記載を略した。ここには歯音 (s), 反り舌音 (ʃ) と硬口蓋音 (ç [=s]) はあるが、IとVの類はない。

9.5 子音の他に4つの「半母音」、すなわち音節を担って母音と同様に働くことも、音節を担わずに子音と同様に働くこともできる音 (réalité phonique) がある。【まず】これに該当するものにiとuがあり、音節の頂点とならない場合にはそれぞれyとwに転じる。パリの発音でje nie [[ni]]「私は否定する」のiがnous nions [[njõ]]「我々は否定する」では音節を成さなくなることに見られるように、これはフランス語でも行われていることである。yとw以外にも、サンスクリットではlとrが実際に音節核となることがある<sup>(3)</sup>。例えばpṛ̥thu-「広い」は二音節である。これに類する現象は他の言語にも見られ、例えばチェコ語のprst「指」やplný「充ちた」ではrとlが音節を担っている<sup>(4)</sup>。インドの【デーヴァナーガリー文字による】書記法では母音的なr, lと子音的なr, lとが全く異なる文字で表記される。ここでwと記している文字は、今日の発音に合わせてvで転写されるのが伝統になっている。もっとも、このような発音は恐らくインドの書記法が整備された時代から行われてきたと思われる。

9.6 【サンスクリットの】母音は本質的にaの一つしかなく、これに長短の別がある。この言語にはēとōもあるが、これらはi及びuと交替し、初源的にはai及びauであって、今でもそのように感じられている。フランス語の場合にも、aine「鼠径部」やaune「約1.2m」はêne [[ɛn]]及びône [[on]]と発音されているが、その綴りから、かつては二重母音を持っていたことが窺われる<sup>(5)</sup>。【サンスクリットには】また音節を成す長い「半母音」、すなわちī, ū及び長い成節のr, lもある。だが、これらの音素はより古い様々な結合から転じて生じたものであり、この点から言い得ることに、本来的には母音はたった一つしかなく、それが延

長されたり、縮減してゼロになったり、あるいは周囲の音と様々な融合をしたりして、印欧諸語に見られる各種の母音度 (vocalismes) が生じたのだとも考えられる。今日ではもはやサンスクリットの優位性は信じられていないとしても、この点についてはサンスクリットの中に非常に早期の印欧祖語の仮想的状態のモデルを見る傾向が存在しており、その傾向は初期の比較言語学におけるよりも恐らく今日のほうが著しい【Cf. 9.17ff.】。

**9.7** 祖語の再建に際し、サンスクリットのみごとな子音体系から、Ⅲの反り舌の類は程なく除外された。さらに古いイラン語のテキストがかなり古くから知られており、これによってかつては「頭頂音」(cacuminales) と呼ばれた反り舌音がインド語派の改新であることが明らかだったのである<sup>(6)</sup>。これによって4つの類、すなわちここでⅠ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴとした唇音、舌尖音、硬口蓋音及び軟口蓋音が残った。ⅠとⅡと他の言語の相当形との対応にはほとんど疑問の余地がなかった。【Ⅰ唇音を含む例：】Skr. pitá(r), Gk. patér, Lat. paterについてはすでに上で触れた【Cf. 1.4】。【Ⅱ歯音を含む例：】「3」はSkr. trayas<sup>(7)</sup>, Gk. treîs, Lat. trēs<sup>(8)</sup>である。だが、硬口蓋音と軟口蓋音については事情が違う。サンスクリットの硬口蓋音、例えば jñā-「知る」のjは、ラテン語の gnōscō やギリシア語の gignōskō の軟口蓋音、すなわち g に対応することが確認された【Cf. 5.5ff.】。次に、サンスクリットの軟口蓋音は通常ラテン語やゲルマン語の唇軟口蓋音に対応する。一例を挙げれば、疑問詞はサンスクリットでは k- を持つが、ラテン語では qu-、ゴート語では hw- を持っている。しかし、Skr. kravis「生肉」、Gk. kréas「生肉」、Lat. cruor「血」<sup>(9)</sup> や Skr. yuga-「くびき」、Gk. zugón, Lat. jugum<sup>(10)</sup> のように、サンスクリットの k, g にギリシア語やラテン語の k, g が対応する場合もあり、そのため祖語には三つの類が想定されることになった。無声音を記せば、すなわち \*k' で記される硬口蓋音の類、[\*]k で記される軟口蓋音の類、\*k<sup>w</sup> で記される唇軟口蓋音の類である。今日では、硬口蓋音と軟口蓋音の区別はなかったと、そしてギリシア語の k, ラテン語の c にサタム語でも k が対応しているような場合は特定の条件と類推的発達によって説明されることが多い。そのため、以下では祖語における硬口蓋音と軟口蓋音との区別は考慮しないことにし、例えば無声音の場合だと \*k 及び \*k<sup>w</sup> と記す、二つの類のみを扱うことにする。

**9.8** 極めて微妙な問題を提起しているのは、子音の系列の再建である。この点で、初期の比較言語学者諸氏はサンスクリットに全幅の信頼を置くことをためらわず、上記1, 2, 3, 4の四系列、すなわち無声音、無声帯気音、有声音、有声帯気音を祖語に想定していた。四系列を持つのはインド語派だけであり、イラン語派でさえ二系列しか持たないものであるから、改新が考慮の対象となってもよさそうなものであった。だが、四系列は一見して非常につじつまが合っており、2の系列すなわち無声帯気音の系列が幾分か周延的な性質を帯びていることには目が及ばなかったのである。この点については以下で再度触れる【Cf. 9.83ff.】。加えて言えば、通例、帯気音化というのは無声音に行われることであるのに、この現象が有声音の場合にだけ生じるような体系は奇異であると今なお考えられている。

**9.9** このように、19世紀の間中用いられた子音体系は下記のものであった。ここには三類の舌背音があり、今なおこのような体系を支持する向きもある。

*p	*t	*k'	*k	*k <sup>w</sup>
*p <sup>h</sup>	*t <sup>h</sup>	*k <sup>h'</sup>	*k <sup>h</sup>	*k <sup>hw</sup>
*b	*d	*g'	*g	*g <sup>w</sup>
*b <sup>h</sup>	*d <sup>h</sup>	*g <sup>h'</sup>	*g <sup>h</sup>	*g <sup>hw</sup>

9.10 表記方法について一言添えておくと、多くの著者が g<sup>wh</sup> のような表記法を好んでいるという事実がある。このような表記法は、h が口腔内での調音に後続する要素であるという少々幼稚な発想法から生まれたものである。だが、実際には、円唇化と閉鎖（上の例の場合には舌背）と同じく、気音も同時に行われる現象である。表記する際に続けて書かざるを得ないのは、これらをいっしょに書くことができないからに過ぎない。

9.11 この見事な体系に関して考慮すべき事柄については後に詳述することにする【Cf. 9.83】。

9.12 古典的な再建において想定される歯擦音 (sifflante) は唯一 \*s のみである。サンスクリットにはこれ以外にも歯擦音が存在するが、それらは新しく生じた反り舌音<sup>(11)</sup>であるか、\*k'からの規則的発達<sup>(12)</sup>である。サンスクリットの表【9.3】の中の c<sup>(13)</sup> はインド・イラン語内の硬口蓋化によって生じた音であり<sup>(14)</sup>、単純無声音の場合を除いて、その結果は satem のプロセスの結果と合一した<sup>(15)</sup>。この過程は次のようなラテン語からフランス語への変化によく似ている。すなわち【有声音の場合、】Lat. galbinu(s) [[g]+a] 及び gentes [[g]+e] は F jaune, gens となっており、その初頭にはどちらの場合にも同じく [ʒ] が生じているのに、【無声音の場合だと】異なる発達が行われていて、Lat. campu(s) [[k]+a] からの F champ には [ʃ] が、Lat. centum [[k]+e] からの F cent には [s] が生じているのである<sup>(16)</sup>。

9.13 【祖語に】想定される鼻音は m と n の二音のみである。サンスクリットにはこれ以外にも鼻音があるが、これらは、少なくとも初期において、実際の独立性を持たない異音に過ぎなかった<sup>(17)</sup>。

9.14 次に想定されるのは二つの「流音」\*l, \*r と、\*y 及び \*w である。サンスクリットの場合に準じて、これらの音素と二つの鼻音は、鳴音 (ソナント) の項目の下に一括され、母音がない場合に音節頂点として機能し得たと考えられる。この場合、これらの音は \*l̥, \*r̥,

【\*】i, 【\*】u, 【\*】m̥, 【\*】n̥ と表記される。\*al, \*ar, \*am, \*an という連続は \*ai, \*au と全く同じように二重母音として機能すると考えられている。この点については後述する。

9.15 母音に関しては、a と ā の他に、音節主音的ソナントを除外しても、少なくとも二つの長母音 \*ī と \*ū が想定される。

9.16 そして最後に、インド・イラン語の i が他語派の a に対応するとき、シュワと呼ばれる母音 \*ə 想定される。これは例えば【Skr.】pitā(r)「父」に対して Gk. patér, Lat. pater, OIr. athir<sup>(18)</sup>, Goth. fadar<sup>(19)</sup> のような場合である。

## 母音は一つだったのか？

**9.17** 上記のような【サンスクリットを重視した】体系の基礎的特徴が全幅の信頼を失ったのは、19世紀も三分の二を過ぎてからのことである。そうなると、比較作業はもっと厄介な感じになった。インド・イラン語は \*k' を歯擦音化するというサタムの発達を受けたばかりでなく、古い \*k<sup>w</sup> に起因する [k] をも時に硬口蓋化するのだが、この点を取り上げてみよう。例えばラテン語の小詞 -que 「～と」に当たるのは【Skr. \*】ka ではなく、ca であり、[kya] あるいは [tʃa] のように読まれる<sup>(20)</sup>。この硬口蓋化の条件が検討され、得られた結論は、この現象が音声環境によって生じたものに過ぎないということであった。すなわち【Lat.】tegō 「私は覆う」と toga 「覆い、トガ」のように e と o とは交替するが、ラテン語やギリシア語などの他の諸言語の支持するところだと、この【インド・イラン語の硬口蓋化の】現象が生じるのは o ではなくて e が期待される位置においてである。この交替については以下に詳述する。ここから導かれる結論として、かつて e と o との区別が古くから行われており、インド・イラン語統一体の初期においてもこの区別が保たれていたが、インド・イラン語にのみ起こった後代の変化のためにこれらが a に合一してしまったと考えられたのである。

**9.18** ここでの話題をよく理解するためには、紀元前三千年、つまり、ペリクレス<sup>(21)</sup>の世紀を遡ること二千五百年前に、上で e と o の区別と呼んだ現象が何を意味するのかを詳しく考えてみなければならない。アッティカのギリシア語において、légō の é はフランス語の léguer の場合と、また lógos の o はフランス語の rôle の場合とそれぞれほとんど同じであったと考えられる。つまり、これらは二つの全く異なる母音であった。だが、これらが両者とも単一の母音に端を発していることに疑問の余地はない。諸言語から得られた経験からすると、もともとあった母音はたった一つであり、これは例えば a で表すこともできることだろうが、その調音は環境によって変わり得た。その事情は、パリにおいて tasse 「一杯」の a の発音が人によって異なり、ある者は fasse<sup>(22)</sup> の母音【[a]】を、またある者は lasse 「疲れた」の母音【[a]】を用いているのと若干似ている。ギリシア人の言語的祖先が、インド・イラン人の祖先と分かれた時代には、その言語にはわずかに異なる二つの母音の質があったと考えられる。その一方は [æ] と記される英語の cat の a に、他方は英音で [ǣ] [=IPA [o]], 米音で [ɑ] と記される pot の o に類するものであったろう。インド・イラン語の祖先において、[k] + [æ] は [k'æ] を経て [tʃæ] に転じたが、[a] の前の [k] はそのままであった。これより少し後に、インド・イラン語は [æ] と [a] を合一させた。これは今日のパリの若者が patte 【規範的には [pat]】と pâte 【同じく [pat]】を区別していないことに少々似ている。これらは五六十年前には巷でそれぞれ [pæt], [pát]<sup>(23)</sup> と発音されたものであった。ギリシア語では逆に両母音間の差異が強調されて、[æ] は [e] に、続いて [e] となり、[a] は [o] を経て [o] に転じたのである。

**9.19** だが、該当する方言において、問題の後舌母音が [ǣ] であったのか、それとも [ɑ] であったのかはどうでもよいわけではない。[ǣ] が用いられる方言においては、[æ] と [ǣ] の間に [ɑ] が生じる余地があった。この [ɑ] は \*kaput 「頭」のような平俗な構成の語に見られる。この語の本来の意味は「壺」であったと思われる。ギリシア語やラテン語では、本来

的な単一母音【=a/】の後舌の異音【= [a]】がかなり早期のうちに区別されるように【=独立した音素に】なったと思われるが、このような言語においてはこの [a] は [o] に転じることはなかった。Lat. *potis* (原義は「主人、能力のある者」；Cf. *pot-erat*「彼はできた、主人であった」【過去完了】) に生じる *o* は、*caput*「頭」の *a* ときちんと区別される。他方、サンスクリットでは *kapúccala*「髪束」【<\*kaput】でも、*pátis*「夫【、主人】」の場合と同じ *a* が用いられている。ゲルマン語も *a* と *o* を区別していない。Lat. *caput* に対応するのは OE *hafud* <sup>(24)</sup> であり、*potis* に対応する Goth. *-faps*「夫」(*brūþ-faps*「妻の尻に敷かれた男」) の場合と同じく *a* が現れている。ラテン語とギリシア語のように \**a* と \**o* を区別する言語にはイタリック語、ケルト語、アルメニア語、トカラ語があり、他方、インド・イラン語やゲルマン語のように両者を区別しない言語にはヒッタイト語、バルト語とスラブ語がある。ちなみにスラブ語の場合には、両者の合一は後代に生じたのではないかと考え得る。

**9.20** インド・イラン語を別にすれば、\**e* と \**o* あるいは \**a* との区別は一般的である。このような区別がどのような条件で生じたのかは今日に至るまで明らかとなっていない。問題の言語の発達の中のどこかの時点で、アクセント位置に関わりを持ったと推論することは大いに可能である。

**9.21** アクセントの性質、その出現の諸条件、アクセントと談話のメロディーとの諸関係、といったものは、音素や音素間の関係がそうであるように、時の流れの中で変化して行く。文証される印欧諸語はいずれも独自のアクセント体系を持っているが、巧みな比較によって、【印欧祖語の】ある一時期において母音はアクセントのある位置で保存され、それ以外の位置では消滅する傾向があったと考えることが可能となる。母音が *e* あるいは *o* の形で出る場合には**盈階梯**、母音が失われた場合には**ゼロ階梯**、母音の痕跡が残っている場合には**低減階梯**という呼び名が用いられる。低減階梯の母音はその後の発達において完全な母音としての地位を取り戻すことになるが、その質は【各語派によって】異なる。無アクセント音節において通常期待されるのはゼロ、すなわち母音が脱落することであるが、このゼロによって発音困難な子音連続が生じるような場合には、支え母音が用いられたと考えられる。これはフランス人が *match[a] de football*「サッカーの試合」、*arc[a] de triomphe*「凱旋門」、*ours[a] blanc*「白熊」、*Félix[a] Potin* といった場合に子音連続の発音を容易にすべく、いわゆる「無音の」*e*【たる [ə]】を用いるのと同種の現象である。

**9.22** 単一の画面に再建を映し出すことをやめ、相次ぐ段階を区別しようとするのであれば、*e/o* の交替を説明するべく初めに頭に浮かぶのは次のようなアイデアである。つまり、母音はアクセント位置にあるとき前舌の響きを獲得して [æ] となり、アクセント位置以外では脱落するが、脱落によって発音不能な子音連続が生じるような場合には、その母音は保持されたかあるいは復活し、後舌の響きを獲得して [a] あるいは [ɑ] となったと考えられる。

**9.23** 伝統的な再建において縮減母音 <sup>(25)</sup> を用いて説明が与えられるような場合は、一部の言語あるいは言語群に特有の、結果として完全な母音を復活させるといふ、より後代に生じた現象によって説明されるべきである。その復活した母音の質は言語によって異なり、例えばラテン語では *a* であり、ゲルマン語では *u* である。



**9.24** 初め、[æ] と [ǣ] とは同一音素の異音に過ぎず、その分布はアクセント位置によって決定されていた。しかしアクセント体系がわずかに変われば、これら両者の音韻論的独立性が確立されることにつながり、その結果/æ/と/ǣ/とはアクセント位置に無関係に生じるようになったと考えられる。そのときから、あらゆる類推による拡大が生じる余地が生まれたのである。「足の」【属格】に当たる形は非常に古くは \*pedés であったと思われ、ラテン語に pedes に由来する pedis 【主格 pēs < \*péd-s】が生じているが、ギリシア語では podós 【主格 poús < \*pod-s】であって o が二つ現れている。本来、期待されるのは【アクセントが語尾にあるため語根の母音が失われた】\*pdés なのだが、これが早期のうちにより発音が容易な形に置き換えられたのである。支え母音を用いた場合には \*podés が生じ、対格 \*pedm に期待される母音を類推によって拡大すれば \*pedes が生じる。後者はラテン語の形態の基礎となったと考えられる。別な環境においては、属格の語尾 -és がアクセントを失【ってその結果母音を失】い、o でその母音を復活させれば \*podos が生じ、ここからギリシア語の形態が得られることになろう。しかし当然のことだが、このような考えに基づけばほとんどどんな形でも説明できてしまうわけであり、そのため多くの人々はこれが唯一の説明法ではないと考えている。

**9.25** やむを得ず、非常に古い時代にこの言語にあったと認められる諸形態には \*e/o というたった一つの母音しかなかったと想定すべきであろう。この単一の母音は本来/a/であり、[æ] と [ǣ] の間の様々な実現が行われたと考えられる。\*e と \*o が区別されるようになるのは後の特殊化によってである。例えば複数の指標 \*-es は \*-s とは交替するが \*-os とは交替しないし、母音語幹の呼格の指標は【\*】-e であって、複数属格の語尾は \*-om であり、また完了の語幹母音は \*-o- である。とは言え、\*e/o のように常に二文字を並記することにするのも得策ではない。このようにすると文章は読みにくくなるし、諸形態の認定も困難となり、声を出して読むことができなくなってしまう。確かに曖昧にはなるのだが、この点にはやむなく目をつぶり、単に \*e という表記を用いることにしたい。

**9.26** 以下に述べるように、印欧語の非常に古い層においては母音の一つしかなかったとする仮説が葬り去られることはなかった。この仮説は最初はサンスクリットの体系がヒントになって生まれたが、今日ではコーカサス諸語に類似の現象が見られるという支持を獲得するに至っている。これらの言語では、確かにいくつかの母音があるものの、少なくとも本来的な語彙においては母音音素をたった一つであるとみなすことが可能であり、その音質を決定するのは環境なのである。慣例に倣ってその母音を a で記しておくとし、pa は [p] が唇音であるため母音も円唇化して [pə] と、ta は [t] の閉鎖が [e] とほとんど同じ位置で行われるため [te] と発音される等々である<sup>(26)</sup>。

## 長母音

**9.27** ここで、印欧語の再建をどのように把握すべきかに関して結果的に大きな影響を及ぼすことになる、もう一つの問題点を再度取り上げることとする。長母音の占める位置についてである。長母音は様々な言語に現れ、また印欧祖語に想定されるが、これらには二種を区

別し得る。そのうちの一方は、母音 \*e/o と交替し、母音の質が変化しない長母音、すなわち \*ē と \*ō である。これは例えばラテン語の対格 *pedem*、属格の *pedis* に対する主格 *pēs* 【足】に、あるいはギリシア語の対応語の対格 *póda*、属格の *podós* に対する主格 *pōs* (πόῦς と書かれる) に、あるいはまた同じ語のラテン語複数属格 *pedum* (<\*pedom) に対するギリシア語 *podôn* にも現れている。

**9.28** この他に、シュワ 【ə】、すなわちヨーロッパ諸語では a、他方インド・イラン語では i と交替する長母音がある。「立っている」、すなわち英語の *stand* に当たる形を例にすれば、サンスクリットの基底形は *sthā* だが、これに対応する分詞は *sthita-* であり、ラテン語では *stā-re* に対して *status* となるのはこのためである。ラテン語で「贈り物」の *dō-num* には *ō* が現れるのに「与える」には *datus* 【過去分詞】のように a が現れ、「私は種をまいた」の *sēvī* 【完了】で *ē* なのに「種をまく」の分詞は *satus* で a となっているのも同様の現象である。すなわち、分詞の母音ゼロが期待される本来の無アクセント音節においては \*ə が想定されるが、完全母音が期待される位置では長母音が生じ、その質は場合によって -ā-, -ō-, -ē- のいずれかである。Ferdinand de Saussure は、このような場合にシュワ \*ə がソナント、あるいは例えば i, y のような半母音として機能するという提言を行った<sup>(27)</sup>。\*leikw- 「残す」のような語根がアクセントを失うと、母音 (\*e/o) が消失し、ソナントの i が音節の頂点となる。例えばギリシア語では *leipō* 「私は残す」に対して *élipon* 「私は残した」【アオリスト】である。これと同様に、ラテン語の *satus* 「種をまいた」の祖形を \*səto-s と考え、ここでは *sēvī* 「私は種をまいた」に見られる語根 \*seə- からアクセントが別の音節に移ったために \*-ə- が【a の形で】生じているとみなしたのであった。長母音 -ē- は -ea- という「二重母音」が単純化して生じたもので、これはギリシア語の *leipō* に現れる二重母音 *ei* が程なく長母音の [i:] に縮減してしまったのと同様の現象であると考えたのである。

**9.29** 他方、\*ā が再建される基底形にも、普通シュワとの交替が見られる。\*ē と交替しない \*ō の場合にもまた同様の現象が観察される。そのため、これら二つの場合において母音の質を決定しているのはシュワなのではないかと考えられるに至った。このように考えれば、三つのシュワの区別が必要となる。第一のシュワ ə<sub>1</sub> は母音の質に影響を及ぼさず、したがって【先行する】母音はシュワのない時に e と o が現れるのと同じ条件下で ē と ō で現れる。第二のシュワ ə<sub>2</sub> はその母音に [a] の「色づけ」をする。第三のシュワ ə<sub>3</sub> は母音に [o] の「色づけ」をし、そのためこの場合には e と【o との】の交替の諸条件がよくわからなくなってしまう。

### 「喉音」(ラリンガル)

**9.30** セム諸語では、一連の子音が隣接する母音に上記のような作用を及ぼすことがよく知られている。確かに多くの場合にあまり適当な呼称とは言えないが、これらの言語ではこの種の子音が「喉音」と呼ばれており、そのため程なく上記の三つのシュワの名称にもこの【喉音という】語が用いられることになった。このようにして生まれ、その後の発展を見ることになるこの理論は「喉音理論」と呼ばれている。長い間この理論では、Saussure が行ったの

と同じ、かなり数学的な手法が採られていた。 $*e_2 = *ā$  といった等式が利用され、では  $e_2$  は物理的にいったい何なのかという問題は究明されず、「喉音」を記すのに母音を表す字である  $e$  が相変わらず用いられていた。その後、【 $e$  の代わりに】H を用いて【 $e$  に加えられたのと】同じ数字を加える習慣が一般化した。問題の音の性質についての熟慮には必ずしもつながらなかった。

**9.31** 長母音とシュワの関係についての考察と並行して、以下の指摘が行われた。シュワはインド・イラン語で  $i$  で【、その他の語派では  $a$  で】現れるが、インド・イラン語の場合を含めてすべての言語で  $a$  で現れる  $*a$  があり、この  $*a$  が生じるのは語頭と  $*kaput$  のような平俗な形成の場合にはほぼ限られているのである。比較の足がかりと考えられるのは、Lat. *ager* のような畑を表す語<sup>(28)</sup> や、Lat. *agō* のような「導く」の類の意味の語<sup>(29)</sup>、鋭さを表す語根【 $*ak-$ 】<sup>(30)</sup> 等である。同様に、Lat. *odor* 「におい」<sup>(31)</sup>、*octō* 「8」<sup>(32)</sup>、*ovis* 「羊」<sup>(33)</sup>、*os* 「骨」<sup>(34)</sup> といったように、【 $*e$  と交替しない  $*o$  が見られるのも語頭の位置が一般的である。もっとも、 $e$  を持つ交替形が実証されないのは単なる偶然であるとする議論も後を絶たない。

**9.32** そこで、もともと語頭に母音の質に作用する「喉音」があり、この音があったために上記の母音が生じ、その後にこの音自体は消失したと考えられた。【 $*H_2egro-$ 】>【 $*agro$ 「畑」、【 $*H_3ewi-$ 】>【 $*owi-$ 「羊」等というふうにてである。当然だが、「喉音」はこの場合には母音の前に置かれており、母音を延長させることがないため、その存在の唯一の痕跡は母音の質の変化 (coloration) である。

## ヒッタイト語の「喉音」

**9.33** 50年の長きにわたって、時の指導的立場にある比較言語学者諸氏は、【上記のような喉音を】完全に仮想的な数学的単位であるとみなし、これを利用しようとはしなかった。だからと言って、全く無視されていたというわけではない。少なくとも一部の比較言語学者は自身の見解にこれを取り入れていた。例えば「喉音」を全く考慮の対象から外すとすれば、Meillet の著作は不可解となる。ただし彼は番号付きのシュワは用いていない。一連の研究者が公然と「喉音」を取り上げる勇気を得たのは、ヒッタイト語に証拠が発見されてからのことである。楔形文字で書かれるヒッタイト語をローマ字に転写する際に、 $h$  という文字が頻繁に用いられる。これは簡単に  $h$  と記されることも多いが、ドイツ語のアッハラウト【 $[x]$ 】と同様の実現を持つ音素であると考えられる。この字が現れるのは、非常に多くの場合に、上記の先駆的研究で「喉音」が想定されていた語においてなのである。例えば *newahh-* という動詞は Lat. *novā-re* 「新しくする」に正確に対応しているし、「骨」はヒッタイト語で *haštai* であり、喉音理論で想定されるこの語【 $*H_3est-$ 】と対応する。また、この種の形態においてアルメニア語にはしばしば  $h-$  が現れる。例えば「におい」を表す *hot*, Lat. *avos* 【> *avus*】に対して *haw* 「祖父」、Lat. *avis* に対して *haw* 「鳥」といった具合にてである。しかし、アルメニア語では後代に語頭に  $h$  が付け加えられたケースもあり、そのためにこの証拠の信頼性はあまり高くなくない<sup>(35)</sup>。

**9.34** ヒッタイト語がこの理論の裏付けとなるのは部分的に過ぎない。この言語と他の諸言

語との比較の確実な範囲で言うと、確かにヒッタイト語の *ḥ* は「喉音」が予想される位置に現れるのだが、「喉音」が予想される位置でヒッタイト語にその痕跡が見られない場合もまた存在するのである。例えば Skr. *ánti*, Gk. *antí*, Lat. *ante* 「前に」の語頭の *a* の説明のために「喉音」が予想され、そして実際に語義の同じ Hitt. *ḥanti* にそれが現れている。だが、Skr. *apa*, Gk. *apo*, Lat. *ab* の初頭に予想される喉音は、ヒッタイト語の対応語 *apa* には見られない。そこで、*[a]* の色に染める喉音は一つではなく二つあり、そのうち的一方だけがヒッタイト語に保存されたのだと考えられた。ここに数学的手法は限界を迎え、これら二つの異なる音が、両者とも隣接する母音を後舌に引き寄せる力を持つと考えられるようになった。【ヒッタイト語に】現れる【喉】音はドイツ語 *ach* あるいはスペイン語 *jota* の音 *[[χ]]* に相当する軟口蓋あるいは口蓋垂の摩擦音と思われ、他方【ヒッタイト語で】脱落してしまうその音は咽頭等のもっと調音点の奥深くにある音であつたろうと想像される。このようにして口蓋垂音と咽頭音という、二種類の *H<sub>2</sub>* が想定されるべきとなる<sup>(36)</sup>。

**9.35** ヒッタイト語では *a* と *o* が区別されないから、*o* 色の「喉音」*[H<sub>3</sub>]* と *a* 色の「喉音」*[H<sub>2</sub>]* も区別できない。他の言語のデータから *o* の音色が予想される場合にも、*a* の場合と同じ状況となる。すなわち、*ḥastai* のように期待される「喉音」が現れる場合もあるが、例えば *\*peH<sub>3</sub>-* に起因し、Lat. *pō-tāre* 「飲む」に対応する *pasi* 「飲(み込)む」におけるように、その「喉音」が現れない場合もある。したがって、*o* 色の「喉音」にも二種を想定する必要性が生じ、ヒッタイト語でその一方は保たれ、他方は失われたと考えられる。暫定的に *H<sub>2</sub>* と *H<sub>3</sub>* との調音上の差異を考慮しないことにしておくと、*H<sub>3</sub>* に想定されるのはやはり口蓋垂音と咽頭音である。

**9.36** 「喉音」*H<sub>1</sub>* には音色を変える力が認められず、隣接する母音の交替する音色 *\*e* と *\*o* はそのままに保たれる。Gk. *tí-thē-mi* に対する【Hitt.】*te-*「置く」<sup>(37)</sup> の場合、あるいは *be* 動詞に当たる【Hitt.】*es-*<sup>(38)</sup>、Lat. *edō* 【「私は食べる」】や *Eeat* に対する【Hitt.】*ed-*「食べる」<sup>(39)</sup> のそれぞれ初頭の場合には、この *H<sub>1</sub>* の痕跡が現れていない。だが、*e* の隣にあるときに Hitt. *ḥ*<sup>(40)</sup> が生じている場合もあり、これらはギリシア語やラテン語の *ē* を含む諸形態と比定され得る。例えば【Hitt.】*meḥur* は「時点」の意味と思われ、Lat. *mētiōr* 「私ははかる」と比定される<sup>(41)</sup>。この例に見られるように *ḥ* には音色を変える作用はない。興味深いことに、この *ḥ* は母音の間にあるときには一つだけ書かれるのに、*a* の隣にあるときには二つ並べて書かれる。この点から、*meḥur* の *ḥ*<sup>(40)</sup> と *newaḥḥ-* の *ḥḥ* とは異なる音素を表す蓋然性が高いと言える。一般にヒッタイト語で母音間の二つ重ねた文字は他の言語の無声音に、重ね書きされない文字は有声音に対応している。だが、ここから言い得るのは、ヒッタイト語の *ḥ* と *ḥḥ* とが異なる音素であったということだけであって、必ずしも有聲・無聲の差異であったとは限らない。だとすれば、*-ḥḥ-* は隣接する *a* の場合に見られるように舌全体を後方へ押しやる作用を持つのであるから軟口蓋ないし咽頭摩擦音を、他方重ね書きされない *-ḥ-* は舌の位置に何等作用しないのであるから声門音をそれぞれ表したとみなしていいだろう。音韻表記すれば上の例語は */newax-/* 及び */meʔur/* のように記されよう。ここに用いた */r/* が表すのは、舌の後退をもたらしような咽頭音ではなく、声門音、すなわち舌が全く関わりを持たない気管のレベル

の音である。

9.37 以上をまとめると、「喉音」理論と二つの色づけが区別されないヒッタイト語のデータを比較検討することによって、次のような【祖語の】体系が想定されよう。

【ヒッタイト語に】		
	現れる場合	現れない場合
色あり（口腔奥の音）【=H <sub>2</sub> , H <sub>3</sub> 】	X	h
色なし（声門音）【=H <sub>1</sub> 】	?	h

#### 帯気音化と有声化

9.38 だが、この理論に従えば消滅した「喉音」の痕跡は音色への影響（色づけ）と先行母音の延長だけではない。喉音は先行する子音を帯気音化したり、これを有声化したりすることもあったと考えられる。帯気音化は主としてサンスクリットに現れる。例えば、E stand, G gestanden に生じる「起立」を表すよく知られた語根を例に取り上げてみよう。この要素は sta-tion という語にも見られ、またラテン語の sta-bat に由来する【être の】半過去の était もここに端を発している<sup>(42)</sup>。祖語に再建されるのは \*stā, すなわち \*steH<sub>2</sub>- であるが、サンスクリットの形は sthā- であり、その弱韻形は sthiti- 「起立」に見える。\*steH<sub>2</sub>- から出発すれば \*stā が期待されるのだが、母音が脱落した場合に \*stH<sub>2</sub> が得られ、ここに接尾辞 -ti が加えられた際に支え母音（サンスクリットでは i）が付け加えられたと考えられる<sup>【原註】(43)</sup>。\*stH<sub>2</sub>iti- からは sthiti が得られ、ここから -h がこの語根に属す他の諸形態にも拡大された。他の言語においては、類推によって気音を伴わない形態が好まれたか、あるいは気音が一般に何の痕跡も残さずに消失したと考えられる。

9.39 他方、後続する「喉音」によって生じる有声化は多くの言語に痕跡を残している。好例は「飲む」を意味する諸形態である。フランス語では potable 「飲料用の」なのに boire 「飲む」であって、後者の初頭に b- が現れているのもこの有声化に起因している。想定される語根は、Lat. pōtare にも見える \*peH<sub>3</sub> である。この語根から出発して、動作の持続性を表す常套手段である重複を用い、語頭に p をもう一つ加えて i をはさめば \*pi-pH<sub>3</sub>e- が得られよう。ここで \*p と \*H<sub>3</sub> の間の母音はゼロ階梯を取っている。Skr. pibati 「彼は飲む」やこれと完全に対応する【O】Ir. ibid （語頭の p- は規則的に脱落する）等において、H<sub>3</sub> の直前の p が有声化している。とすると、H<sub>3</sub> は有声音、すなわち声帯の振動を伴って発された音であったに相違ない。語頭の子音を重複させたこの形態には p... b... というつながりが現れるが、このつながりは奇妙なためローマでは嫌われ -b- が一般化された。こうして【Lat.】bibit 「彼は飲む」が生じる。だが、その北方40キロほどのところにあるファレリイ【Cf. 5.56】ではその逆に語頭の p- が一般化されて pipafō 「私は飲むであろう」が生じている。

9.40 「喉音」理論は長い間かなり胡散臭いものと受け取られており、そのため、この理論の支持者は、想定される「喉音」の数を増やせばこの胡散臭さが膨れ上がるだけだと感じていた。すなわち、この数が多く見えない方が、その数は最小限必要なものだけに減らした方

が無難に思えたのである。上記の二つの場合には、aの色づけと帯気音化とが、そしてoの色づけと有声化とがそれぞれ同時に生じるものとみなすことにした。例えeを有する形が実証されない場合であっても、oは常にeの交替形であると無理にみなして、oの色づけを用いない向きがあったことについては上【9.31】に触れたが、このこともこの趣旨に添っている。

**9.41** 今や全てのデータが印欧祖語には弁別的な母音が少なかったことを示すがごときであり、その場合には、状況が同じ実証される言語を基にすると、その代わりに非常に豊かな子音体系が期待されることになる。もちろんサンスクリットのきれいな体系という宝を全面に押し出すこともできよう。だが、既に触れたように、また以下に詳しく述べるように、5列5類の正方形の体系、すなわち25の単位<sup>〔原註2〕</sup>のうち、再建される最古の印欧祖語に想定されるのは13個<sup>(44)</sup>でしかない。これに歯擦音[s]とソナント[i, u, r, l]を加えても都合18個である。これらにたった一個の母音が結合するとすると、子音+母音という弁別的な音節は18個だけということになるが、これは滑稽に思えるほど少ない数である。現在のパリのフランス語にはこのようなつながりが234個<sup>(45)</sup>あり、確かにこれらの中には実際には用いられていないものも含まれているが、これらはいずれも可能なつながりである。そうすると、独立した文節単位の形では文証されない複数の音素が前史時代に存在したと想定するのなら、その【音素の】数が三つあるいは四つ以上になることを退けるべき理由は見当たらなくなる。

### 差違の保存

**9.42** ある論点からすれば「喉音」の数を増やすことが適当と考えられる。この論点を理解できるのは、発達の過程で何らかの音的特徴が保持されるのが、諸形態を互いに区別するのにそれが単独で役立つ場合のみであるということに気付いた方々のみである。すでに確立されているように、弁別的な関与性は時を経ても何らかの形で保持されるが、余剰な諸特徴は結果的に失われる方向に向かうものである。したがって、「喉音」が気音の形で保持され、またその隣接音を有声化し得たのなら、気音化と有声化のそれぞれが弁別的であったということになる。換言すれば、母音が脱落した後に\*peH<sub>3</sub>-「飲む」のH<sub>3</sub>がp-を有声化し得たのなら【Cf. 9.39】、この言語には有声でないもう一つの【気音化を起こす】H<sub>3</sub>があったと考えられるのである。

**9.43** これは多くの言語に確認されることである。フランス語を例にとると、物理的に言っ て有声音、すなわち声帯の振動を伴って発される音には/b v d z ʒ g m n ñ l r y/の音素があるが、有声性が弁別的なのは、それぞれ/p f t s ʃ k/と対立する/b v d z ʒ g/の場合のみである。これ以外の6つの音の場合には有声性は弁別的でない。フランス語には無声の/m n ñ l r y/が存在しないからである。さて、これらの有声子音のうちの最初の6つ【b v d z ʒ g】の有声性は関与的であるため、その前に無声の子音があればその子音にも有声性が及んでしまう。例えば anecdote の有声の/d/がその前の/k/を有声化し、後者は/g/となる。他方、例えば réclamer では/l/の有声性が関与的ではないため、/k/の無声性には何の影響も及ばず、フランス人なら誰でも réclamer のことを \*régclamer などと発音することはない。【同様に】/n/の有声性も関与

的ではなく、したがって shrapnel を \*shrabnel と、Daphné を \*Davné と発音することなど絶無である。

9.44 以上より、有声と無声という二つの H<sub>3</sub>の音素が想定され、これと同様にして二つの H<sub>2</sub>の音素も想定することができる。H<sub>2</sub>の二つの音素の一方は明らかに無声であると考えられるが、それはこの無声性が後に「気音」の形で現れ、これによって他方と区別され続けるからである。

9.45 興味深いことに、このような気音化と有声化の現象が生じるのは色付きの「喉音」【= H<sub>2</sub>, H<sub>3</sub>】の場合に限られているようである。そうすると、上でヒッタイト語の考察を行った後に到達した結論、すなわち色なしの「喉音」【=H<sub>1</sub>】が声門音であるとする結論【Cf. 9.36】が支持されることになる。声門音はそれ自体が声門で調音される音であるため、その性質上、声門【=声帯】の振動を伴うことがなく<sup>(46)</sup>、声門が閉じている場合は /ʔ/ で、声門が開いている場合は /h/ で記される。声門が閉じている場合であっても開いている場合であっても、その器官は振動しないのが普通である<sup>(47)</sup>。

9.46 以上より次のような体系が想定される。a と o の区別のないヒッタイト語のみを扱うわけではなくなるため、ここではこれら二つの異なる色付け【=H<sub>2</sub>, H<sub>3</sub>】が区別されている。以下で詳しく述べる事情により、後者【=H<sub>3</sub>】には右肩に <sup>w</sup> を添えて記す。

	非声門音 色付けあり			
	[a] 【の色付け】 (H <sub>2</sub> )		[o] 【の色付け】 (H <sub>3</sub> )	
	無声	有声	無声	有声
口蓋垂音	χ <sup>[原註3]</sup>	ʁ	χ <sup>w</sup>	ʁ <sup>w</sup>
咽頭音	ħ	ʕ	ħ <sup>w</sup>	ʕ <sup>w</sup>
	声門音 色付けなし (H <sub>1</sub> )			
閉鎖音	ʔ			
摩擦音	h			

9.47 ここで明言しておかねばならないが、上記のように再建される音素一つ一つについて納得の行く対応を示すことは無理である。有声化が想定される一連のケースで、有声化は o の色付けとともに生じることがわかっている。そのため、上表の χ<sup>w</sup> と ħ<sup>w</sup> は単に均整を取るためにのみ記されているようにも思えるかもしれない。隣接する子音が有声化することから明らかに言えることは、その「喉音」に有声性が関与的であり、したがってその体系には有声の「喉音」に対応する同じタイプの無声の「喉音」があったはずである、ということであ

る。だが、有声のかたわれを持たない無声の「喉音」が弱まって [h] になり、その後先行子音の気音となるということは十分に有り得る。つまり、有声化について当てはまることは気音化には当てはまらないのである。多種多様な音韻体系から今日我々が持っている経験から言い得ることに、「喉音」の予想される音価である摩擦音の体系に有声と無声の対立があれば、この対立が体系全体に及ぶはずである。o の色付けが有声化とともに生じ、a の色付けではそれが行われないなどとする理由はない。上の表に音素が記載されているからといって、その言語のある段階にそれが存在していたと断言しているわけではない。音素目録の中にそのような音があった可能性があるという意味であり、新たな事実や既知の事実の新解釈がそれを要求するならば、それを想定するのをためらうべきではなからう。

### a の色付け

**9.48** 上で色付けと呼んだ現象に立ち戻らねばならない。母音の質が隣接する子音（群）に影響を受ける可能性があることが認識されるようになったのは、上でも述べたように、セム語、及びその中でも特にアラビア語の経験からであった。このような現象は他の言語にも見られることである。例えば英語ではこの言語の /r/ と /l/ を発するとき舌がスプーン状にへこむ<sup>(48)</sup> ため、【これらに隣接する】/r/ がかなり /w/ に接近する結果となり、pretty /'prɪti/ はほぼ ['pruti] のように、silk /sɪlk/ や人名の Wilson /'wɪlsn/ はそれぞれ [suk] や ['wusn] のようにも聞こえることがある<sup>(49)</sup>。フランス語では何世紀もの間、lasse の -ss- は lace の c と区別され、舌尖を口蓋に近付けて発音されていた。そのためバリの発音では lace [las] と lasse [las] とが明瞭に区別されており、子音が母音の調音に影響を与えたことが今日でも見て取れる<sup>【原註4】</sup>(50)。

**9.49** アラビア語ではいわゆる「強調」にこの作用が広く見られる。通常、アラビア語の ā は前寄りに調音される。川あるいは川が削った谷を意味する wād(i) は、グアダルキビル川 (Guadalquivir; 文字通りには「大きな川」の意)<sup>(51)</sup> などのスペインの河川名に含まれており、この川の名には a が用いられているが、今日では [wæ:d] のように発音されており、これはフランス語に oued 【[wɛd]】の形で受け入れられている。また、しばしば否定で用いられる隠語の bezef “much” 【[beʒɛf]】<sup>(52)</sup> はアラビア語の bezzāf に端を発している。他方、アラビア語で /a/ がいわゆる「強調音」に隣接すると、極めて後舌の母音となる。これはバリ16区のいわゆる「マリー・シャンタル」<sup>(53)</sup> と呼ばれる発音で lasse に用いられる母音である。この「強調」というのは実際には舌全体を口腔の奥に押しやることであり、これによって tāb [tæb] 「彼は悔いた」と āb [ʔab] 「彼は焼いた」とが区別されることになる。ここで下に付けた点が「強調」を表している<sup>(54)</sup>。「強調」のしかたを心得ているアラビア人は、これらの母音が物理的には異なっているのに両者を同じであると感じており、第一の、そして決定的な違いは子音部にあると考えるのである。この現象を知らない外国人は母音の違いに目が行ってしまう。いわゆる「強調音」の t は [t] の調音にこのような舌の後退を加えたものである。

**9.50** しかしながら、この舌の後退は、音素の他の調音特徴 — /r/ の場合だと舌尖と声門での調音 — に付け加えられる単なる一特徴に留まらず、子音の調音の主要な部分を成すことも



あり得る。そう考えた場合にはこれは口蓋垂音、あるいは舌の後退をもっと激しく行えば咽頭音ということになる。そして、隣接する母音も、子音に「強調」が加えられた場合と同様の影響を受ける。これこそが上で色付けと呼んだ現象である。

**9.51** 印欧語のいかなる段階にであれ、子音の調音に付加される「強調」に類する現象を想定すべき根拠はない。だが、この言語に想定されているのは調音点の深い諸音素であり、これらは時を経る間に弱まって、最終的に現在のいかなる印欧語諸形態においても消滅してしまう。この弱化は徐々に行われ、子音の調音は隣接母音の調音に影響を与え、子音そのものは消滅してしまうこととなった。問題の子音を /x/ で、その言語の開母音を /a/ でそれぞれ表せば、/xa/ というつながりは実際には後舌の [a] を用いて [χa] と発音されたことであろう。この言語に声門音の /h/ があれば、この音は隣接母音に影響を与えないから、/ha/ というつながりは中間的な [a] を有する [ha] と発音されると思われる。さて、/x/ が弱まり、ついには聞こえるのが声門で作られる摩擦のみとなって、結果的に [h] に合一したとすると、かつての /xa/ と /ha/ との区別は /ha/ と /ha/ として行われることになる。さらにその後 /h/ が弱まれば、/a/ と /a/ との区別が残ることであろう。/a/ と /a/ とが二つの弁別的単位、言い替えば二つの異なる選択肢になれば、両者の差違は自然に強調され、/a/ は [e] 及び [e] に近づいて行くと考えられる。例えば Lat. agō (<\*H₂egō)「私は押す」と ego「私」(<\*H₁egō)との差違はこのようにして生じたと説明されるのである。

## o の色付け

**9.52** o の色付けにも舌の後退が予想されるが、これと同時に唇の丸めが加わっていたと考えられる。口腔の他の部位における調音にこのような円唇化が組み合わさることもあることはよく知られており、円唇化は伝統的に印欧祖語の特徴の一つに想定されている。Lat. quattuor 及びその末裔たる It. quattro, Sp. cuatro に \*kʷ が見られるが、このタイプの唇軟口蓋音に現れているのがまさにこの要素である。さらに、円唇性は [k] などの閉鎖音ばかりでなく、[χ] などの摩擦音にも加わることがある。これに類する場合として、例えばスペイン語には cuanto [kwanto] と並んで Juan [χwan] があり、確かにここに生じる [kw] 及び [χw] の両要素の密着度は \*kʷ 及び \*χʷ と記される音の場合ほど緊密ではないが、閉鎖音にも摩擦音にも円唇化が加わっていることが確認できる<sup>〔原註5〕</sup>。このため、Gk. ózos (<osdos), G Ast, Hitt. hasd-wer のような枝を表す語の古い形は \*χʷe-sdo- と考えられる。この形成法は \*ni-sdo- に由来する F nid, Lat. nīdus, E nest「巢」のそれと同様に見える。両者の第二要素は語根【\*】sed「座る、とまる」の母音度ゼロの形である。「巢」の第一要素【\*】ni- はよく確認される語根であり、下方への運動を表す。枝を表す \*χʷe-sdo- の場合には別な接辞が加わっており、より短期間の滞在場所が示されている。これは今日【のフランス語】で《comme l'oiseau sur la branche》「枝にとまった鳥のように」という言い回しで呼ばれるような場所である。

**9.53** 代数的に得られた H₃を上記のごとく音韻論的に [χʷ] とする解釈には反論もあった。このケースで言えば、\*kʷ が Sp. cuatro「4」の cu- となることに見られるように、[ʷ] と記される円唇化の要素は最終的に [w] となることが期待されるのであって、喉音理論が想定する

ように、後続母音の [a] が [ā] に円唇化するなどということはないとする反論である。このような反論をする方々は次の事実を忘れている。「4」という語の語頭の \*k<sup>w</sup> が Sp. cuatro の /kw/ に転じるようなことはむしろまれであり、より多くの場合にはサタム語で k に、ケルト語で k あるいは p に、ゲルマン語で p、次いで f に、ギリシア語で前舌母音の前で t- に転じているのである。\*k<sup>w</sup>ōr に由来する Lat. cūr 「なぜ」に見られるように、\*k<sup>w</sup> は円唇母音の前で k に転じるのが常である。ゲルマン語では \*k<sup>w</sup> が h<sup>w</sup> となったが、Ehow (<hū<h<sup>w</sup>ō) に見られるように、その円唇性は ō の前で失われている。この【円唇性という】子音の特徴は、次の母音の質に影響を及ぼした後は、独立した文節を成す意義を失ってしまうのである。

**9.54** \*χ<sup>w</sup> やその他の唇軟口蓋化した摩擦音が、母音の前ではなく、その後に位置するときには、/eχ<sup>w</sup>/ が、例えば語末や次の音節が子音で始まっている場合のように、同一音節に属する場合を区別して扱う必要がある。この場合には \*χ<sup>w</sup> は先行母音を延長させて消滅し、円唇性は母音に影響を残す。このアマルガムは結果として [ā:] となるわけだが、この長母音が他のプロセスから生まれた同じ質を持つ長母音と異なるトーンで発音されるなら (Cf. 上記原著 p. 74 [5.31f.]), そこにはかつての [eχ<sup>w</sup>] という連続の弁別的能力がすべて保たれていることになろう。今のところはこのような長母音は ō と、対応の短母音は o とそれぞれ簡単に記しておく。

**9.55** /χ<sup>w</sup>/ が二つの母音の間にあれば、音節の切れ目は \*-e-χ<sup>w</sup>e- となって、/χ<sup>w</sup>/ は二番目の音節に属することになる。この場合、/χ<sup>w</sup>/ は消え去り、先行母音の延長は行われない。だが、その円唇性は母音連続を避けるために利用され、二番目の音節は -we- のようになる。この唇音的要素は [w] と実現され、これに先行母音の質を変える力とはもはやないだろう。だが、-we- には現れなかった【/χ<sup>w</sup>/の】舌の後退が先行母音に作用し、この母音は舌の後退を伴った a の音色となる。結果として得られるのは -a-we-、あるいはこの位置で o との交替が行われれば -ā-wo- である。この二番目の母音は母音で始まる語尾の一部となることがあるから、この交替はますますあり得る。だが、もちろんこの語尾は子音で始まる他の語尾と交替する。したがって、この語基は場合によって -aw- 【<母音が後続する場合の \*-eχ<sup>w</sup>-】あるいは -ō 【<母音が後続しない \*-eχ<sup>w</sup>-】に終わることになる。

**9.56** ここから類推による拡大が行われて、第一の音節の母音が o になった -owo- や、a を延長した -āwo- なる形が生まれたと考えられる。基数詞「8」から作られた序数詞が例示するのはまさにこのような過程である。この基数詞は \*H<sub>3</sub>ekteH<sub>3</sub> と再建され得る。-eH<sub>3</sub> は恐らく双数のマーカーであって<sup>(55)</sup>、語基の部分が表わすのは親指を除いた手、つまり4本の指であり、したがって基数詞「8」の原義は「4本の指×2」ということであろう。序数詞は普通、基数詞の語基に -o- を加えることによって形成される。以下に述べる理由から、二番目の H<sub>3</sub> は音韻論的に言って /χ<sup>w</sup>/ ではなく、有声音の /b<sup>w</sup>/ だと思われる。これにより「8番目の」は \*H<sub>3</sub>ektes<sup>w</sup>o と再建されることになり、これは規則的に 【\*】oktawo- となる。ところがギリシア語とラテン語に現れる形はそれぞれ ogdowo- と octāvo- である。ギリシア語形の -w- の前の -o- は期待通りに短いのだが、その質は a ではなく基数詞 októ から類推で o となっている。他方、ラテン語の -ā- の質は期待通りだが、基数詞 【octō】の -ō から類推で長くなってし

まっている。ギリシア語に現れる有声の -gd- は \*χ<sup>h</sup>ektr<sup>h</sup>o- という形から説明される。ここには3つの子音の連続が生じており、このような連続は一般的な語彙では現れないものだが、数詞というこの幾分特殊な言語領域においては生じることがあり、またこの領域で説明が可能である<sup>(56)</sup>。

## 数詞

**9.57** 数詞の習得のされ方はその他の語彙の場合と異なっている。一般の語彙はことばを交わす中で学ばれるものなのだが、数詞の場合は…5, 6, 7, 8等々と数えながら覚えるのである。そのため数詞どうして類推が行われることが多々ある。中でも先取り (anticipation) [Cf. 5.33] による類推が最も多い。例えば [F] vingt-quatre 「24」は vingt-quatre と書いてあるかのように発音され、パリでは [vɛtkatr] と、南部では [ventókatrô] となるが、これは trente 「30」、quarante 「40」等の [t] を先取りしたために生じた発音である。【ギリシア語で】「7」が heptá なのに、その序数は hébdomos で、有声音が生じているのも、ogdowo- 「8番目の」の有声音を先取りしたからだと説明されよう。古代教会スラブ語で「7番目の」は sedmŭ であるが、ここにも \*septmo- > \*sebdmo- のように3つの子音の連続が想定される<sup>(57)</sup>。序数詞は非常に活発な派生によって形成されることが多く、話者一人一人が必要とあればすぐに新たな派生形を作り出す能力を備えている。このような新たな序数詞には通常見られない音的な結果が生じることがしばしばある。Eighth には [-tʰ] という結合が生じるが、この音結合はスプリングにも現れておらず、この言語の中では完全に孤立している。フランス語からも例を引いておこう。「子音 + r + i + 母音」という結合において i は -ill- と書かれている場合と同じように [[ij]] と発音されるのが規範であり、したがって例えば ouvrier 「労働者」は \*ouvrieller と書かれているかのように [uvʁije] と3音節で発音される。ところがこのような規範的発音をする人でも, quatrième 「4番目の」を【規範に則った [katʁijem] ではなく】[katʁjem] と2音節で発音することがある。このような発音は明らかに deuxième 「2番目の」、troisième 「3番目の」… cinquième 「5番目の」という2音節語の連続の中で生じたものである。

## 唇軟口蓋音の「喉音」

**9.58** H<sub>3</sub> が円唇化した有声音と無声音であって、恐らく二つの調音点を持っていたとする解釈、つまり口蓋垂音 χ<sup>h</sup> ʁ<sup>h</sup> と咽頭音 h<sup>h</sup> ʕ<sup>h</sup> であるとする解釈は注目を集めた。この解釈を採用すれば、語根 \*gneHw- に特徴的な語尾を加えて作られた gnōv-ī 「私は知った」のような、ラテン語の完了時制に現れる [w] を見事に説明できるのである<sup>(58)</sup>。一部にこの解釈に反対の意を唱える人々もいるが、これは、音的な特徴は弁別的価値を有するときのみに保持される、という機能的原理が理解されていないためである。また、類推を広く利用することに対する抵抗も考慮しなければならない。類推を使えば何でも説明できてしまう、ということは結局何も説明しないのと同じことではないか、という印象を持つ向きもあるのである。だが、例えば印欧語の完了時制については諸言語がみな別々のマーカーを持っているが、このような特定の問題を考察する際には、たまたま一部の完了時制を特徴付けていた諸特徴のうちのひ

とつ(時にはそれ以上)が個々の言語に保持され、これが類推によって他の形態にも広がったのだ、と考えざるを得ない<sup>(59)</sup>。

**9.59** 「喉音」が話題になるずっと以前には、ラテン語研究者は [w] を持つ完了形を長母音に終わる語幹から類推によって拡大したものだという見解を表明していた。Lat. *flāre* 「吹く」、完了 *flā-v-*, E *blow*, G *blāhen* に見られるように、長母音に終わるこれらの動詞が、すべて英語では -w に終わる形態を持ち、それも完了形のみならずすべての時制においてそうであって、他方ドイツ語の対応語にはその -w がまったく欠けているのであるから、類推を排除することなど何をか言わんやだったのである。類例に *sew-sāhen*, *mow-māhen*, *glow-glūhen* 等があるが、ドイツ語の形態の -h- が英語の -w に規則的に対応しているなどとは信じられなかったであろう。

**9.60** 伝統的に長音の *ō* が再建されていたすべての場合において、-w- を有する交替形が見出され、その前にはしばしば *a* の質を持つ短母音があることは注目に値する。これは、唇軟口蓋化音から出発してこの言語の音の機能的発達に予想されることである。

**9.61** 唇軟口蓋化した「喉音」の理論の様々な結果を例示するために、\**prō* のケースを取り上げてみよう。これはフランス語の前置詞 *pour* や接頭辞 *pro-* 「～に好意を持つ」に現れている。その第一義は「前に向かって」である。はじめに \**per* 「～を通して」があり、これに接尾辞 -*eHw* が加わった。\**oktō* のような双数の接尾辞の *Hw* は /*ɛw*/ と想定されるが、この場合の *Hw* は /*ɤ*/ であると思う。両者を合成した \**pr-ɛɤ* では前要素がゼロ階梯を取っており、何かを通過する運動とその先への運動を表わしたと思われる。期待されるのは \**prō* だが、ギリシア語やラテン語のように *ō* と *ā* とが区別される言語において短い *o* が生じる場合もある。だが、末尾の短縮化は様々な母音についてしばしば観察されることでもある。この基底形から作られるもっとも単純な派生語は母音 -*o* によるものである。その意味は「先に行く者」、「第一の」、「重きを成す」、「正しい」、「公正な」、「本当の」となる。古い時代には接尾辞の母音のみが保たれた。そのため音節を成す *r* を持つ \**prɤw*-*o*-<sup>(60)</sup> が生じ、そこから規則的に *Skr. pūrva* や *OCS prǫvŭ* (合成語の第一要素としての *R pervo-*) 「第一の」が得られる。

**9.62** 語根の母音が保たれた場合には \**preɤw*-*o*-> \**prawo*-【Cf. 9.55】となり、そこから *Gmc. [\*] frawo-* が得られる。その意味は社会の第一の人物、すなわち君主である。ドイツ語ではその女性の形 *Frau* のみが今日まで残った。これと平行した発達がフランス語にも見られ、【Lat.】*dominus* 「主人」と *domina* 「女主人」の末裔のうち、女性形の *dame* のみが今日でも用いられており、男性形は *vidame* 「司教代理」や *Saint-Pierre*, *Saint-Martin* をなぞった固有名詞 *Dampierre*, *Dammartin* に名残が見られるに過ぎない。このようにフランス語とドイツ語には平行的な発達が見られるが、これが偶然でないことは明らかで、カロリング時代の二言語併用に端を発している【Cf. 5.77】。G See が「湖」の意では *F (le) lac* と同じく男性で、「海」の意では *F (la) mer* と同じく女性である点については原著 p. 43【4.3】で触れたが、このような類例は様々な分野に及んでいる。

**9.63** この \**preɤw*-*o*- が【\**preɤw* > \**prō* からの】類推による母音の延長を経れば \**prāwo*- となつて *R prav-yj* 「右の、正しい」に至り、そこからさらに *pravda* 「真実」が生じている。興味深

いことに、ラテン語で形式的に対応する *prāvos* 【> *prāvus*】は合成語 *\*dē-prāvos* 「歪んだ」の意味になっている。*dēprāvatiō* 「歪曲」を参照されたい。これは【F】《C'est du joli!》に類する皮肉的な用法に端を発していると考えられる<sup>(61)</sup>。ギリシア語で「第一の」はアテーナイで *prōtos*、ボイオティアで *prātos*<sup>(62)</sup> である。*-to* という接尾辞はギリシア語においてもラテン語においても若い数の序数（「二番目の」を除く）に用いられている。Lat. *quartus* 「4番目の」、*quīntus* 「5番目の」、*sextus* 「6番目の」を参照されたい。Gk. *húpatos* 「最高の」にも見られるように、ギリシア語で用いられたのはその変種たる *-ato* であって、これが *\*prow-* あるいは *\*prōw-* に付与されてアッティカの形が、*\*praw-* あるいは *\*prāw-* に付与されてボイオティアの形がそれぞれ生じたのである。

**9.64** Gk. *pérusi*, *péruti* 「去年」は *per* と語根 *wet-* 「年」の母音度ゼロの形 *ut-* に *-i* を加えて作られているが、所格の規則的な指標 *-i* はこのような時を表わす副詞に用いられている。この所格の *-i* が *\*preχ-* に加えられれば *\*prawi* となり、母音間の *w* が脱落して Lat. *prae* 「前に」が生まれた。類推によって *\*prōwi* 「適時に」が作られ、これは Gk. *prōi* や G *früh* 「朝に、早く」に現れている。

**9.65** 船の前部を表わす F *proue* は Lat. *prōra* を介して Gk. *pró(i)rā* に起因しているが、後者は *\*preχ-* から接尾辞 *-riā* によって形成されている。

**9.66** Martin S. Ruipérez は、*actiō* “action” と *actīvus* “active” のような、ラテン語の *-tiō*, *-tiōnis* 【単数属格】に終わる形態と *-tīvus* に終わる形態との平行性を指摘している<sup>[原註6]</sup>。彼は、これらの形態が、よく知られた抽象性の接尾辞 *-ti-* に *-eH<sub>3</sub>-* が後続して形成されていると見ている。このようにして得られた接尾辞の基底形 *-tieH<sub>3</sub>-* は形容詞的接尾辞 *-o-* の前で *-tiH<sub>3</sub>-* に弱化し、ここから *-tiwo-* となるが、【母音が後続しない場合の *-tiH<sub>3</sub>-* からの】類推で生じた *ī* を伴えば *-tīwo*<sup>(63)</sup> となり、Lat. *-tīvus* に至る。この接尾辞の基底形に他言語でもよく知られた「拡張子」*-n-* が付加され、名詞形が構成される。主格では *-tieH<sub>3</sub>n-* がラテン語で *-tiō* に、オスク語で *-tiuf* (< 【\*】*-tiōns*) になる。後者では規則的な音発達と類推による復元とが行われている。属格では語尾 *-es* の前で母音度ゼロの基底形、すなわち *-tiH<sub>3</sub>n > -tīn-* が期待され、これはオスク語に想定される形と一致する。ラテン語の *-tiōnis* は当然主格からの類推によって生じた形である。

## 原 註

[原註1] T. Burrow が *The Sanskrit Language* (London, s. d.), p. 105, 106で行った提言を採用することにする。

[原註2] 軟口蓋鼻音が欠落しているため実際は24個である。原著 p. 164の二つの表を参照せよ<sup>(64)</sup>。

[原註3] ここでは国際音声学協会の勧めるところに従い [x] を用いた。実際は、このギリシア文字は軟口蓋の擦音 (spirante) の意味で用いて、[x] は口蓋垂の摩擦音 (fricative) に割り当てた方がよいと思われる。擦音と摩擦音の違いについては André MARTINET, *Eléments de linguistique générale*, Paris, 1960, [邦訳：三宅訳『一般言語学要理』] §2-24を参照されたい。とはいえ、この場合のように進

化のプロセスを取り扱う際には、軟口蓋音なのか口蓋垂音なのか、問題の音素の調音点を明示化しない記号を用いるのが得策とも言えよう。だが、ここで [x] ではなく [χ] を選んだ理由は、以下で一連の「喉音」が硬化 (durcissement) して、x が伝統的な価値を持つ【すなわち [ks] と読まれる】ラテン語の *senex* や *imperatrix* のごとき形態に至るケースを取り上げる際に、「喉音」を [x] と記したのでは読者に混乱を招くのではないかと思ったからである。

原註4) André MARTINET, *Économie des changements phonétiques*, Berne, 1955, 9章, §9-15, 及び Martin JOOS, *The medieval sibilants*, *Language* 28, p. 222以下を参照されたい。

原註5) André MARTINET, *Économie...* 第8章を参照。

原註6) *Biuium*, *Homenaje a Manuel Cecilio Díaz y Díaz*, Madrid, 1983, 9. 275-277所収。

## 訳 註

- (1) すでに記したように原著者の用いる音声記号は IPA とは若干異なる。1.34, VII章原図14及び巻末の記号解説、及び Martinet (1972) を参照。〔〕は IPA の場合と同じく中舌化を表している。よく知られているように、現代フランス語の /ə/ は前寄りに調音される。Carton, 神山 (1995: 118) 等を参照。
- (2) 原著では軟口蓋鼻音の *n* すなわち [ŋ] が省かれている。位置による異音とみなされているのであろうが、私見では同様の扱いが *n* [n] と *ñ* [ɲ] についても可能と思われる。9.13を参照のこと。
- (3) 音節核となる場合には転写の際にこれらの子音字の下に小さな丸を付するのが慣用である。ただし、サンスクリットには成節の *ṣ* を表す文字は存在するが、*ṣ* に転じるのが原則であるため、ほとんど実証されない。今日の慣用ではこれら音節を成す *ṣ* は直後に挿入母音の *i* を伴って発音されることが多い。
- (4) チェコ語にはこれ以外にも成節の *m*, *n* が存在する。ただし、チェコ語の成節の *m*, *n* の前には挿入母音 (anaptyxis) が用いられることも多く、例えば *sedm* 「7」は [sedum] のようにも発音される。
- (5) 二重母音が両要素の中間的な性質を持つ長母音に転じることは言語の別を問わず頻繁に生じる現象である。ただし今のフランス語は母音の長短の差異を失っている。日本語でも「でかい」と「でけー」、/kambe/に起因する神戸/kaube/ (かうべ) が/ko:be/ (こうべ) に転じたことなど、同種の現象が頻繁に見られる。神山 (1995: 162ff.) 参照。
- (6) サンスクリットでの呼称 *mūrdhanya-* “of the head” の訳より *cerebral* と称される。この種類の音は印欧語の中ではインド及びその近隣の言語にしか現れず、他方、インドの先住民の言語であるドラヴィダ系の言語には豊富に生じるため、後者から前者への影響が想定される。初めに生じたのは *ṣ* であり、これは *iurṣk* の後に位置した IE \*s から転じた。ほとんど同じ条件下でイラン語は *š* を、スラブ語は *x* (*š*) を発達させ、またリトアニア語とアルメニア語にも部分的に類似の現象が散見されるため、あるいはこれらが共通の現象であるとも疑われる。ただし、この問題を生成音韻論的に検討した下郡 (1997) はこれらを別個の現象と断じている。この *ṣ* と隣接する位置においてその他の反り舌音が生じた: \**ṣ*+*t* > *ṣt*; \**ṣ*+*d* > \**zd* > *d*; \**ṣ*+*s* > \**ss* > \**ts* > *t* (語末) / \**kṣ* (語中), etc. ただし、*n* は同一語中の *rṣ* あるいは後続するその他の反り舌音の影響で *n* から転じて生じた。Cf. e. g. Burrow (1955: 96ff.).
- (7) 原著では誤植により *treys* が記されている。これは印欧祖語に期待される形である。
- (8) < IE \**treys* < √ \**trei-*. 母音間の *y* が消失してラテン語形が得られる。ギリシア語形も同様にして得られるが、\**e*+*e* > \**ē* は狭い [e:] と発音され、*ei* と綴られる。
- (9) < IE \**kreua-* “raw flesh”. 5.41並びに V 章訳註76も参照のこと。
- (10) < IE \**yeug-* “to join”. 現代語の *E yoke*, *G Joch*, *F joug* あるいは *R ūro* もすべてここに端を発する。この例に見られるように一連の場合において他言語の *y-* にギリシア語の *z-* が対応することがある。さもないと対応するのは Gk. *h-* である。高津 (1954: 78ff., 87) 等を参照されたい。Gk. *z-/h-* の分布に関しては、有聲のラリングル+y > Gk. *z-*, 無聲のラリングル+y > Gk. *h-* と

いう Sapir の想定が知られている。

- (11) すなわち  $\text{ʃ}$  のこと。その本来的な音価は反り舌の  $[\text{ʃ}]$  と考えられる。この音が生じた背景については上記訳註6を参照のこと。
- (12) すなわち  $\text{ɣ}$  あるいは  $\text{ɟ}$  のこと。フランスの文献では後者が、ドイツの文献では前者が用いられることが多い。その本来的な音価は恐らく  $[\text{ɣ}]$  あるいは  $[\text{ɟ}]$  である。5.5及びV章訳註11を参照されたい。 $*\text{k}'$  の歯擦音化あるいはサタム語に関しては5.5以下を参照。
- (13) 現在の伝統的発音は  $[\text{tʃ}]$  あるいは  $[\text{tɕ}]$  であるが、Mayrhofer (1978: 16) によれば、あるいはその定義に則れば、その本来の音価は硬口蓋閉鎖音の  $[\text{c}]$  であったと考えられる。硬口蓋閉鎖音が歯擦音化して  $[\text{tʃ}]$  や  $[\text{tɕ}]$  あるいはまた  $[\text{ts}]$  に転じるのは多くの言語に観察される現象である。詳しくは、あるいは例に関しては神山 (1995: 152ff., 248, 256) を参照いただきたい。同様に  $\text{c}$  の有声音  $\text{j}$  も元々は  $[\text{j}]$  であり、後に  $[\text{ɕ}]$  や  $[\text{ɟɕ}]$  と発音されるに至った。
- (14) 祖語の軟口蓋音あるいは唇軟口蓋音はインド・イラン語において本来の前舌母音の前でこの種の硬口蓋化を受けた。サタム化、すなわち祖語の硬口蓋音が歯擦音化する過程も硬口蓋化と称されることがあるため、この過程はしばしば第二硬口蓋化と称される。
- (15) IE  $*\text{k}$ ,  $*\text{g}$ ,  $*\text{g}^h$  はサタム化によって Skr.  $\text{ś}$  ( $\text{ç}$ ),  $\text{j}$ ,  $\text{h}$  となるが、前舌母音の前の IE  $*\text{k}^w$ ,  $*\text{g}^w$ ,  $*\text{g}^{wh}$  は Skr.  $\text{c}$ ,  $\text{j}$ ,  $\text{h}$  となる。
- (16) 詳しくはV章訳註20を参照されたい。
- (17) サンスクリットには9.3の表に記された  $\text{ṇ}$   $[\text{n}]$  と  $\text{ṅ}$   $[\text{ŋ}]$  の他に  $\text{ṇ}$   $[\text{n}]$  及び anusvāra と呼ばれ通常  $\text{ṁ}$  や  $\text{ṃ}$  で転写される鼻母音もある。 $\text{ṇ}$  は上記訳註6に記したような環境で、 $\text{ṅ}$  は硬口蓋音が隣接する位置で、 $\text{ṇ}$  は軟口蓋音の前で、anusvāra は摩擦音の前でそれぞれ生じた  $\text{n}$  あるいは  $\text{m}$  の位置的な異音と考えられる。
- (18) ケルト語に特徴的な語頭の  $*\text{p}$  の脱落と母音間の  $*\text{t}$  の緩音化が行われている。それぞれ5.79以下及びI章訳註7を参照されたい。
- (19) ゲルマン子音推移については5.61ff. を参照されたい。
- (20)  $[\text{kya}]$  は  $[\text{kja}]$  の誤記である。 $[\text{k}]$  と  $[\text{j}]$  とは同時に調音されるため、より正確には  $[\text{k'ja}]$  と、あるいは硬口蓋閉鎖音とみなせば  $[\text{ca}]$  と記すことができる。恐らくこれが本来的発音であり、 $[\text{tʃa}]$  すなわち  $[\text{tʃa}]$  の類は後代の歯擦音化を経た後の発音である。
- (21) 495?-429BC. アテーナイの黄金時代を現出した政治家・将軍。
- (22) faire 「する、作る」の接続法現在I, 3sg.
- (23)  $[\text{ð}]$  は巻末の記号表に記載されていない。原著者によれば後舌性を強調した表記とのことである。IPA で書けば  $[\text{pɒt}]$  であるから、他所に合わせれば  $[\text{pât}]$  と記される。
- (24) 通常形は OE  $\text{hēafod}$  (>E head) である。この例はウムラウトした  $\text{a}$  たる  $\text{ø}$  を含む ON  $\text{hǫfuð}$  に置き換えてもよい。
- (25) いわゆる schwa secundum ; 例えば高津 (1954: 99ff.) を参照。
- (26) 原著者に照会したところアプハズ語を考慮しているとの御返答を戴いた。
- (27) *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, 1878. これはソシュールが21才の時の著作である。9.29で紹介される3種のシュワのうち  $\text{ə}_1$  と  $\text{ə}_2$  との区別があいまいだが、超時代的な業績である。
- (28) Skr.  $\text{ājra-}$  “field”, Gk.  $\text{ἀγρός}$  “field” 等を根拠に IE  $*\text{agr-o-}$  を想定するのが通例。次に記す  $*\text{ag-}$  (< $*\text{H}_2\text{eg-}$ ) の派生語と考えられ、したがって  $*\text{ag-r-o-}$  (< $*\text{H}_2\text{eg-r-o-}$ ) と分析される。E acre (OE  $\text{æcer}$ ), G Acker も上記の正則的発達 Gmc.  $*\text{akraz}$  に由来する。Lat.  $\text{ager}$  は幹母音のない形に起因し、 $\text{r}$  の前の  $\text{e}$  は語源的に由来を持たない挿入母音（支え母音）であろう。
- (29) 及び Gk.  $\text{ἄγω}$ , etc. < IE  $*\text{ag-}$  (< $*\text{H}_2\text{eg-}$ ).
- (30) < $*\text{H}_2\text{ek-}$ : e. g. Lat.  $\text{acus}$  “needle” < $*\text{ak-u-}$ ; Lith.  $\text{akmuõ}$ ,  $\text{akmeñs}$  “stone” < $*\text{ak-men-}$ , etc. メタテーゼを経た  $*\text{ka-men-}$  等を想定することにより (Gmc.  $*\text{kamer}$  >) OE  $\text{hamor}$  (E hammer) や (PS  $*\text{kāmon-}$ ,  $*\text{kāmen-}$  >) OCS  $\text{kamy}$ ,  $\text{kamene}$  (R камень) が導かれ得るが、詳細を欠く。
- (31) < $*\text{od-os-}$ ; 及び Gk.  $\text{ὀδμή} \sim \text{ὀσμὴ}$  “smell”,  $\text{ὄζω}$  (< $*\text{od-yo-}$ ) “to smell”, etc. < IE  $\sqrt{*}\text{od-}$  (< $*\text{H}_3\text{ed-}$ ).
- (32) 及び Gk.  $\text{ὀκτώ}$ , Gmc.  $*\text{ahtō}$  (OE  $\text{eahta}$ , E eight), etc. < IE  $*\text{oktō}$  (< $*\text{H}_3\text{ekteH}_3$ ).

- (33) 及び Gk. ὄϊς, Skr. ávi-, Lith. avis, OCS овѣса, etc. < IE \*owi- (<\*H<sub>3</sub>ewi-).
- (34) 及び Gk. ὄστρεόν, Skr. asthán-, etc. < IE √\*ost- (<\*H<sub>3</sub>est-; Cf. Hitt. ḫaštai (9.33)). また OCS kostъの初頭の k-も \*H<sub>3</sub>の硬化の結果とみなし得るが、その生起の条件を見出すのは困難に見える。
- (35) ここに記された古典アルメニア語の三つの単語の初頭には確かに喉音が h の形で現れているように見える: hot <\*H<sub>3</sub>ed- (\*od-), haw (Lat. avus) <\*H<sub>2</sub>ewo- (\*awo-), haw (Lat. avis) <\*H<sub>2</sub>ewi- (\*awi). だが, hōgi ~ ōgi “spirit”のように h のある形とない形とが併存している場合や, hoktember “October” のような外来語 (ただし october + september の混交) にも無意味に付加された場合もあるため, h を直ちに本来的な喉音の反映と考えるには無理がある。むしろ h の付加には何の語源的根拠もないと考えられているようである。例えば Schmitt (1981: 47) を参照。
- (36) ヒッタイト語に現れる H<sub>2</sub> 及び現れない H<sub>2</sub> は, Kurylowicz の a<sub>2</sub> と a<sub>4</sub> に当たる。
- (37) < IE \*dhē- <\*dheH<sub>1</sub>-. Cf. Skr. dadhāti; Lat. facio (ゼロ階梯; F faire, It. fare, etc.), fēcī; Gmc. \*dōn (o 階梯; OE dōn, E do, G tun); OCS dēti (R де(я)ть), etc. Lat. facio の -c- については 9.81 参照。
- (38) < IE \*es- <\*H<sub>1</sub>es-. Cf. e. g. 3. sg. Skr. ásti; Gk. ἔσται; Lat. est; Gmc. \*isti (E is, G ist); OCS jestъ (R естъ), etc.
- (39) < IE \*ed- <\*H<sub>1</sub>ed-. Cf. Skr. 3. sg. áti (<\*ed-ti); Gk. 1. sg. ἔδω; Gmc. inf. \*etan (OE etan, Gessen, etc.); OCS inf. jasti (<\*ēd-tei; R етъ), etc. また別形に Gk. ἐσθίω, Lat. mandere 「かむ」 > mandūcāre (F. manger, It. mangiare), comedere (Sp. comer) がある。OCS jasti から想定される長母音は Winter の法則によって説明されよう。
- (40) 原著には h が記されているが、原著者の理解を得て ħ を記す。
- (41) < IE \*mē- <\*meH<sub>1</sub>-. Cf. Skr. māti “he measures”, Gk. μῆτις “widsom”, μέτρον “measure”, OCS mēra “measure”, etc.
- (42) Cf. 3.12, Ⅲ章訳註15.
- (43) 一般に IE \*ə のインドにおける反映は i であるとされているが、この一般的見解に異論を唱える Burrow はその反映を h あるいはゼロとし、本文の例や IE \*pāter- > Skr. pitar- のごとき場合は支え母音の i が挿入されたものとみなしている。従来の見解からすれば、例えば IE \*dhugh<sub>2</sub>ter- 「娘」 > Skr. duhitar- のような場合においては、母音化した喉音の \*H = \*ə と気音化した \*gH > \*gh > h の両方が同時に現れているかのごとくであって問題が残っていたが、Burrow のこの想定によればこの問題は解決する。神山 (1992) にこの問題の要点が整理されているので参照戴きたい。また、原註 1 に記された文献以外にも Burrow (1950; 1979) がある。
- (44) 9.3の表に記された24個の子音から反り舌と無声帯気音、及び硬口蓋鼻音を除いたら残りは14個であるが、ここからさらに ħ が除外されている。9.94以下を参照のこと。この点は原著者に確認済みである。
- (45) 子音18×母音13と算出されている。通例、フランス語には17個の本来的子音と3つの半母音があるとされるが、原著者に確認したところ、9.43に見られるように原著者は半母音のうち /y/ のみを考慮に入れ、[w, u] は /u, y/ の異音とする立場を取っている。そのため子音の総数は18となる。フランス語にあるとされる母音は12個+鼻母音4個だが、パリを中心とする現代のことばではこれらのうち [a]-[ɑ], [o]-[ɔ], [ɛ]-[œ] の区別が明瞭ではなく、普通は各々のペアのうち前者が用いられる。したがって合計16の母音から3つを減じて13が得られる。
- (46) 紛らわしいことに声門と声帯とは同じ部位を表す語であるが、前者は声を出していない状態を、後者はその逆に声を出している状態を指している。
- (47) その例外となるのはいわゆる「有声の h」あるいは「つぶやきの h」たる [ɦ] である。これはいわば純粋な [h] と母音との中間的な状態であり、[h] を発している状態、すなわち声門が全開となっている状態から少し声門の幅を狭め、声帯が不完全に振動を始める状態を指す。日本語や英語でも母音間にこの音が生じる。神山 (1995: 53f.) 等を参照されたい。
- (48) 英語の /r/ 及び母音が後続しないときの /l/ (dark L) の調音に際して、主たる調音は舌先で行われ、歯茎に接近あるいは接触するものの、また同時に後舌部が軟口蓋に顕著に接近するため、中舌部は不可避免的にくぼんだ形状を取る。言い替えばこれらの子音は軟口蓋化している。



- (49) 実際, Kenyon & Knott (1953: 341) 及び Wells (1990: 557) には *pretty* の第1音節の母音がアメリカ英語において [u] と発音されることがある旨の記載がなされている。
- (50) *lace* の -c- がいわば通常の舌端的 [s] であるのに対して, *lasse* の -ss- はもともと舌尖的 [ʃ] であったと思われる。後者は現代のカスティリア語に顕著だが, かつてはフランス語にも行われたらしい。finish (<finiss-) や push (<pouss-) に見られるようにこの [ʃ] は英語に [f] として受け入れられている。原註4に記された文献以外にも Posner (1982: 130) 及び同書に加えられた訳註23を参照されたい。舌端的 [s] を調音する際に舌は口腔前部に、舌尖的 [ʃ] では逆に後部に集中するから, [a] - [ɑ] の差違が誘発されたとしても不思議はない。
- (51) ジブラルタル海峡西側のカディス湾に注ぐイベリア半島南部、アンダルシア地方の川名, wād が *guad* の形で受け入れられている。この半島の大部分は711年にウマイヤ朝に西ゴート王国が滅ぼされて以来, イスラム教徒に支配されており, 1492年にグラナダを陥落してレコンキスタが完了するまで, 特にその南部はイスラム文化及びアラビア語に大きな影響を受けた。これに限らずアラビア語に由来する地名は数多い。
- (52) *béze*f や *bése*f と綴られる。
- (53) 高級住宅街として知られるバリ16区に特徴的な気取った発音。いわば田園調布や芦屋あたりのお高くとまった御婦人の「ザーマスことば」に相当するかもしれない。
- (54) 音声学的には軟口蓋化ないしは咽頭化であるから, IPA で普通には真ん中にチルダを加えることによって例えば [t̠ɑ̠b] 等と表記できる。
- (55) 数詞では他に \*dwō<\*dweH<sub>3</sub>「2」にも見られる。いわゆる thematic あるいは e/o 語幹名詞の双数主・対・呼格の語尾\*-ō も同起源と考えられる。Cf. e.g. \*wl̥k̥\*ō “two wolves” > Skr. vr̥kā(u), Gk. λύκω, OCS vl̥ka, Lith. vilkù, etc. なお Skr. -(u) は従来難問であったが, ここで話題の H<sub>3</sub>の名残と考えられる。Lith. -ù は「母音+喉音」に由来する acute \*ō > úo から Leskien の法則により規則的に得られる。
- (56) 原著者は印欧語の数詞の体系は他言語からの借用であるという興味深い説を唱えている。1.27を参照されたい。基礎語彙に属す数詞の借用の可能性を疑問視する向きもあるが, 類似の現象は現に日本語にも生じているのでその可能性を否定することはできない。周知のように日本語はその本来の数詞をほとんど失い, 中国語からの借用語が一般に用いられている。「ひとつ, ふたつ, …とお」は現用だが, 「よん」は中国語起源の「し」と, 「なな」は「しち」と揺れており, その他には「二十日」, 「二十歳」, 「三十路」, 「四十路」, 「八百万の神」など散発的な慣用表現があるに過ぎない。「三十日」などは普通「晦日」と書かれ, 数詞が含まれていることなどもはや意識されていない。
- (57) 原文に不可解な記述があったため原著者に照会したところ《avec une sonorité de même origine》の部分削除するとの回答を戴いた。ただし\*septmo-> PS \*sebdma-> CS \*sedmo- (> OCS sedmъ) に生じている有声化の説明は難問として残る。
- (58) 次節にも記されているように, この v に関しては従來說得力のある説明は知られていなかった。例えば Palmer (1954: 273f.) に載せられた諸説を参照されたい。
- (59) 例えばサンスクリットには重複や -vas- を用いる分詞, ギリシア語には重複, 接尾辞 -κ-, 気音化, ラテン語には接尾辞 -v- やアオリストに由来する -s- 等がある。
- (60) 原著の記載をそのまま記した。音節主音的ソナントを明示した\*pr̥x̥-o-を提案したが, 原著者からはこのままにするようにとの指示を戴いた。
- (61) 文字通りには「それはすばらしい」だが, 通常は「それは全然だめだ」という反対の意味で用いられる。
- (62) 原著では prātos だがアクセントを明示した。
- (63) 原著には -tiwō- が記されているが原著者の了解を得て-o-を記す。以下に述べられる -tiōn- における延長と混乱がほしい。
- (64) 原著者からの指示により付け加えた。

参考文献（補遺4）

- Burrow, T. 1950. "Shwa" in Sanskrit. *Transactions of the Philological Society*, 1949. The University College, London.
- . 1979. *The Problem of Shwa in Sanskrit*. Oxford: Clarendon Press.
- Kennyon, John S. & Knott, Thomas A. 1953. *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield, Mass.: G & C Merriam Company.
- 下郡健志. 1997. 「摩擦音の変遷——印欧祖語からスラブ語へのその発達と相対年代決定について——」. 修士論文. 大阪外国語大学大学院外国語学研究科.
- Wells, John C. 1990. *Pronunciation Dictionary*. Longman.

(1999.5.6 受理)

付 記

本編印刷中の1999年7月16日、原著者のルネ・デカルト大学名誉教授 André MARTINET 氏が逝去された。享年91歳であった。氏のご存命中に訳出を完了し、何らかの方法で上梓することを目論んでいたが、見果てぬ夢となったことは慙愧に堪えない。Jeanne MARTINET 夫人をはじめとするご遺族の方々に心からお悔やみ申し上げ、故人のご冥福をお祈りするとともに、一日も早くこの仕事を完成し、故人の墓前に捧げることを誓う。

(1999年8月6日)